上來の問題は、輕々に論斷すべきで無いことは固よりで、予が論述も甚だ盡くさない所があると思ふ。特に此れ等の諒解及び其の實際の運用等に就きては、筆端の上のみでは不可能であるとも思はれるから且らく筆を擱きて博雅大士の示教を俟つことにする。（一二、二、十四、鹿谷にて）

當麻曼陀羅の疑點に就て

石橋誠道

奈良時代の佛教美術は、隨分豐富ではあるが、其中當麻曼陀羅は、最も優秀なものである。而して此の曼陀羅が、今日に至るまで、我が淨土教に於て、如何に多大な影響を及ぼしたかといふこともまた喋々する必要はない。此の曼陀羅の根源は勿論善導の觀經の疏であり、それに依つて善導が畫かれた淨土の變相が三百鋪もあつたといふことが、彼れの傳記に出てあるから、それが東西の諸國に展轉して、遂に我國までも傳つたに相違ないと思はるゝが、當麻寺の淨土の變相、即ち當麻曼陀羅は、それを轉寫したものであらう。そしてそれが、たとひ剝落して殆んど其佛像の形體を知ることさへも出來ないやうになつたとしても、一千百有餘年の今日まで、なほ保存されたといふことは、實に有り難

い事であると言はねばならぬ。余はこの貴き曼陀羅を、一度拜見したいと思ふたのは、既に多年の宿望であつた。

が、圖らずも藤堂祐範君、橋川正君、等の發起に依つて、昨年の九月、之を拜見すべく大和の當麻寺に向つて出發した。小西存祐君、石井龍善君、石井敎道君、塚本隆善君、井川定慶君等も同行であつた。其の日は隨分暑い日であつたので、汗しつぼりで漸く當麻の奥の院即ち往生院へ着いたが、住職藤井峰聞師は、種々心配して、吾々一行を歡迎して下さつたことは、感謝の念に堪えなかつた。

所がこの曼陀羅は、當麻の禪林寺の所有であつて、往生院の身内にはならないので、山内諸寺院の許を得て、其を往生院へ持つて來て、やつと拜見させて貰つた。それは中々大きなものでとても一人で持たるゝものではない、大きな箱を二人でかついで、エンヤラヤツト下へおろす位なものである。そうして大廣間でそれを廣げて拜見すると、これは實に貴いものである。

其の内輪の、畫を書いた所丈の寸法は、縱が一丈二尺九寸五分、横が一丈三尺零寸である、此の四方に各の一尺五寸か二尺位の緣が付いてゐるのだから、つまり一丈五六尺四方の大曼陀羅である。そうして此の内輪の畫の書いてある所は、全く剝落して暗黑で、どれが阿彌陀樣やら、觀音勢至やら又どんな形をしてゐらるゝやら、殆んど解らぬといふ始末である。至極接近して、すかしたり、反射させたりして能く〳〵見ると、佛のみ顏の豐艶な線などが、夢の樣にかすかに見え、謂はれ書きの文

字の一片などを、ぼんやりと認めることが出來る位である。そうして繪の具を使つたものであるか、青黃赤白等のどんな繪の具かつかつてあるか、それさへも殆んど解らない。或は筆で書いたものか、繡にしたものか、それもさつぱり解らない。然し多分筆で書いたものであらうと思はれた。

そして此の曼陀羅の緣起によると、百駄の蓮の絲を集めて織つたものだと言はれてあるが、どうもそれが絹であるか、蓮の絲であるか少しも解らぬ。兎も角二尺四寸五分程の巾の絹が五巾ほど横につないであることは確かに見へる。そうしてその最も下の緣の所、卽ち九品往生を緣起とが書いてある所は、殆んどなくなつてしまつてゐる。唯だその緣の上にある欄杆と下の緣の上部のみがかすかに殘つてゐるのに氣が付くばかりである。

そうしてこの本曼陀羅を轉寫したものが、當麻の曼陀羅堂に掛けてある。此は本曼陀羅のやうに、特別に願はなくても、誰人でも當麻へ參詣したものは皆な見ることの出來る曼陀羅である、此は鎌倉時代に寫したものだとか聞いてゐるが、銅の網が張つて其の中に常にかけられてある。此の曼陀羅も本曼陀羅と同じ樣に、下の緣が殆んどなく、唯だ欄杆の如きもののみが現はれてゐる。此れは全く本曼陀羅の通りに寫したからであらう。

余が今此の文を草しやうと思ふたのは、全くこの下の緣の問題にあるのだ、余は此の下の緣を見た時に、どうも了解の出來ない疑を懷いてゐた、そうしてその題は、どうしても解くことは出來なかつ

たが、近頃西山上人の曼陀羅註記を讀んで後、其題が全く晴れた。それ故に今その事を少し書いて見たいと思ふ。

始め余は此の下の緣の缺けてゐるのは、どういふ譯であるかしらん、實際に始めからなかつたのではあるまいか、それとも年月を經るの久しき、遂に缺損してしまつたのであらうか、若し始からなかつたとすれば、下の緣の上部のみが少しでも殘つてゐるのが怪しからん、若し又缺損したとすれば、外の部分の比較的完全なのに比して、餘りに一部の缺損の度が甚しいと思ふて、彼れこれと考へてゐたのであるが、この缺損は、既に西山上人の頃に始まつてゐつたといふことを知つて、始めてそれが缺損であるといふことを確かむることが出來た。だから今西山上人の註記に依つて、その事實をより詳細に、次に述べて見たいと思ふ。

勅修御傳の三十の卷に依るに、俊乘房入宋の時五祖の影像と與に觀經曼陀羅を持參したと言はれてあるから、宗祖も觀經曼陀羅に關して、多少の識見を所有し給ふたに違いない。然しながら當麻曼陀羅の研究に、最も早く指を染め、而かも深く研究されたのは、恐くは西山の證空上人であらう。證空は、此の曼陀羅の研究の爲めには、內外の諸典を悉く探り印契、伎樂灌頂等をも深く研究して、而して後に當麻曼陀羅註記十卷を書き殘された。此の註記は從來は寫本であつて、中々得難い本であり、偶ま之を得た所で、非常に寫誤が多いので、殆んど了解に苦しむほどであつたが、今は佛敎全書の中

へ編入せられて、非常に便利に見ることが出來るやうになつたのは、實に此上もない幸福である。

そうして西山上人が此の曼陀羅を研究さるゝ樣になつた動機が頗る面白い。其の事情は、彼の註記の序文に委しく說明されてあり、しかもそれが、余が疑ひを懷いてゐた問題と頗る密接に關係をもつてゐるから、次に其の文を擧げて見たいと思ふ。

證空上人の曼陀羅註記の第一の序に曰く、竊かに惟るに弟子(證空)大谷の先師上人(法然)の禪室に入り、多年念佛の法門を學んでより已來、上人の滅し給ひて後は、其の不審ありと雖も、それを決すべき上人なくして、空しく歲月を送る所に、今此の變相を拜見することを得て、先師上人に遇ひ奉るが如く、高祖(善導)和尙に謁するが如し、淨土一宗の釋義の不審は、之に依つて悉く晴れ、世間出世間の作法の由來は、彌よ之を覺ることを得たり、無始より已來、此の曼陀羅に逢ひ奉らざりしが故に今に至るまで生死に流轉して、火宅を出でざりしなり、上人の滅後、弟子(證空)止觀の法門の疑を決せんが爲に、時々西山より太子の御廟願蓮上人の禪室に至り、此の當麻の御堂の前を攀ぢ過ぎしに、人語つて云く、此の御堂の內には、或は天人自ら來つて、織り顯はせる變相あり云云、或は生身の彌陀が、西方より來つて織り顯はせる曼陀羅ありと云云。

此等の語を聞くと雖も、信用せずして、空く年比過ぎ行き畢ぬ。爰に當麻の寺僧法名は見阿といふものあり、齡ひ八十に餘るに自ら西山に攀ぢ來つて謁して云く、大和國當麻寺は、天孫子建立の塲、

彼の行者の練行の靈所なり、生身の彌陀の織り顯はせる、極樂の曼陀羅あり、是れを觀經曼陀羅と名く、其の相最も尊く、上人にあらずば、誰れか之れを開き覺すものあらんや、願くば參詣せしめて、之を說いて吾れに覺めしめ給へ、吾が齡今ま幾くならず、其の功德を聞いて往生せんと欲すと、予酬へて曰く、必ず參して拜すべしと、然るに日を送るに及んで其事を忘れ、參らずして空しく過ぎぬ。

次の年に又來つて云く、吾二十四五の昔、本師阿闍梨(實名覺佛)老耄の後、我に語つて云く、此の曼陀羅の下の緣の畫並に銘文の消えんとするを、吾少の古へ、之を寫し留むと、然るに弟子之を得て箱の底に置きしが、今諸の文の中より、求め出し奉る。是れを拜み給ふべし、是れ即ち蓮の絲をもつて、一夜三昧の間に、織り顯はし給ふ所のものなり、今其の繪並に緣起の段の銘文を持ち來れり云云。

予これを拜して、隨喜歡感禁じ難くして、即ち上足の弟子廿五人を引率して、彼の當麻寺に參詣して、靜かに此の變相を拜するに、是れは觀經曼陀羅のみにあらず、即ち慥かに善導和尙の、觀經の疏四卷の文義をも織れるなり、震旦の和尙の觀經の疏と、日本の生身の彌陀の織り顯はし給ふ所の曼陀羅と、文義一同にして、而かも一分も違ふ所なし、是れ誠に權化の作し給へる所なり、都べて凡夫の境界にはあらず、故に喜涙實に禁じ難く、遂に即ち其の變相を寫し、其の法門を註す、佛菩薩の印像並に樂伎を尋んとして、眞言の法門を尋ねんが爲めに、慈圓座主に謁して天台の灌頂を果し、大僧正

良惠に逢ひ奉つて東寺の灌頂を遂ぐ、すべて南都並に天王寺の樂人舞人を召し謁して、伎樂の具を尋ねたり、凡そこの曼陀羅の儀相を開かんが爲めに、內典外典、世間出世間の、一切の萬法を覓ひ求めずといふことなし、是れ卽ち祕藏の法門なり、難信の法なるが故に、信ずる者は少くして信せざる者は多し。

夫れ曼陀羅は、右の緣りを序分義と名く、觀經の疏の二の卷となす。左の緣を定善義と名く、是れ三の卷なり、下の緣を散善義と名く、則ち疏の四の卷なり、中央の八重を玄義分と名く、則ち一の卷なり、故に觀經の疏四帖を以て。曼陀羅一部を織るなり、疏は先きにして曼陀羅は後なり、震旦の和尙は卽ち彌陀の化身なり、日本にして生身の彌陀、此の變相を織る、震旦と日本と、國替るといへども、善導と彌陀と、共に是れ本迹一佛なり云云已上。

此の文に依つて考へてみるに、今から殆んど七百年前の西山上人の時に、既に下の緣の畫が消えんとしてゐたほどであり、又今から五百年程已前、應永三十四年に、增上寺の開山酉譽聖聰上人が、親しく當麻寺に到つて、本曼陀羅を研究された時に、既に剝落して、殆んど容色が解らなかつたことが酉譽の當麻曼陀羅疏の第九に記されてあるから、今日本曼陀羅が剝落して、下の緣の缺損してゐることは、無理もない譯である、して見ると、余が先に疑つた疑點は、こゝに全く解決された譯である。そうしてその剝落して消えんとしたことが動機となつて、西山上人が曼陀羅の研究に着手されたとい

ふことは、實に興味のある話ではないか。而して西山上人のこの研究から、この曼陀羅は幾度も轉寫されて、日本全國に廣く流布する樣になつた。即ち久しく當麻寺に祕藏されてあつた曼陀羅は、西山上人の力によつて、實際に淨土敎の信者の間に紹介せられて、彼等に多大の利益を與へたのであつたしてみるとこの曼陀羅に對する西山上人の功蹟は、實に偉大なるものと言はねばならぬ。そうして又西譽上人のこの曼陀羅に對する研究と努力とは、決して見逃してはならぬ事であるが、餘りに冗長になつてゆくから、今はこれを略しておく。

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。